大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

澁澤栄一『論語講義』總説　訳注稿（２）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学人文学会 公開日: 2024-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重信, あゆみ, 池内, 早紀子, 山本, 優紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000651

澁澤栄一『論語講義』總説　訳注稿（２）

重信あゆみ、池内早紀子、山本優紀子

本稿は、澁澤栄一『論語講義』の「總説」部分に訳注を施したものであり、『人文学論集』第41集に掲載された「澁澤栄一『論語講義』總説　訳注稿（１）」の続きである[1]。

【凡例】

① 底本は澁澤栄一『論語講義』（二松学舎出版部、1925年）を用いた。また、適宜、程樹徳撰『論語集釋』（中華書局、1997年、新編諸子集成）、『林點四書集注　論語』（須原屋茂兵衛等刊、1808年）などを参照した。

② 本稿の使用文字は、【本文】及びルビは原本に従い、【現代語訳】と註は、通行の文字とする。

③ 註の部分では、原文と書き下しは旧字体を用い、新仮名遣いとした。

④ 書名は、通行の文字で記載している。

【本文】

或は孔夫子が六十八歳[2]の老境になるまでも政治上に戀着せず。早く自らあきらめて。門人や後進の教育に力を盡し[3]。以て道を傳へた方が、孔夫子の爲めにも利益であつたらうと云ふ人もあらん。如何にもさうであつたかも知れぬが。前にも云ふ通り孔夫子の志は一ら王道の復興に存して[4]。他を顧るに遑あらざりしが如し。此老人澁澤の如きも既に八十四歳に達したれば[5]。閑境に退きて修身齊家[6]の道でも講ずる位にしたら可からうと云はるゝ人もあらん。併し余は敢て自ら僭して孔夫子に比するにはあらざれども、孔夫子が自ら出たら、其國の政治が改善せらるゝであらうと思ふて。何國からでも召されさへすれば。輙ち出て仕へたやうに。此老人も出て奔走すれば。或は少しでも世の爲め國の爲め何かの役に立つ事があらうかと思ふのであります。故に電燈問題[7]が起れば之に手を出し。米國の問題[8]が發すれば。之にも奔走し。支那問題[9]が生ずれば之に顔を出したりするやうな事であります。微意の存する所は孔夫子が其志に忠なりし所以のものを學んで、多少なりとも國家民人の幸福増進の途に向つて貢獻したいと云ふ精神に外ならないのであります[10]。

【現代語訳】

あるいは孔子は六十八歳の老年になるまで、ずっと政治に深く執着することなく、早くに自らあきらめて、門人や後進の教育に力を尽くし、道を伝えた方が、孔子のためにも利益であったであろうという人もいるだろう。如何にもそうであったかもしれないが、前にも言うように孔子の志は専ら王道の復興にあって、他を顧みる暇もないようなものだ。この老人渋沢のようなものも既に八十四歳に達したので、閑かに退いて修身斉家の道でも講ずる位にしたらよかろうと言う人もいるだろう。しかし、わたしは敢て自ら身分不相応にも孔子に比べることはできないが、孔子が自ら出たら、その国の政治が改善されるであろうと思って、どの国からでも召されさえすれば、すぐに出て仕えたように、この老人も出て奔走すれば、あるいは少しでも世の為め国の為め何かの役に立つ事があるのではないかと思うのであります。故に電灯問題が起ればこれに手を出し、米国の問題が起これば、これにも奔走し、中国の問題が生ずればこれに顔を出したりするような事であります。ほんのわずかでもある所は孔子がその志に忠実である理由を学んで、多少なりとも国家人民の幸福増進の途に向って貢献したいと言う精神に外ならないのであります。

【本文】

さて孔夫子の人となりは[11]。一言にして言へば常識の非常に發達したる圓滿の人と云ふが適評ならん。古來世の所謂英雄や豪傑は常人に卓越したる特色や長所があると。同時に非常なる缺點や短所もあるものである。而るに孔夫子に至つては特別なる長所と言ふべき所なき代りに。是ぞといふ短所もないのである。故に之を稱して偉大なる平凡人と云ふても適當であらう。孔子も自ら曰く[12]。吾れわかき時賤し故に鄙事に多能なりと。世の中の事大抵通曉せざるはなかりしならむ。史記世家に六藝に通ずとあり[13]。六藝とは弓を射馬を御し字を書き算術をなし禮を行ひ樂を奏する事を指して曰ふ。即ち何事にも堪能なりし事推して知るべし。後年に至り春秋を著はされたるを見れば[14]。歴史の造詣も亦深かりしこと知るべき也。然らば則ち人は釋迦や耶蘇たる事は難しとするも。孔子たる事は甚だ難き事にはあらざるべし。何となれば吾人は非凡の釋迦や耶蘇たる事能はざるまでも。平凡の發達したる孔子たり得べからざる理なければなり。唯勉めて倦まざるに在るのみ。要するに孔子は萬事に精通して圓滿無碍[15]の人である。即ち常識の非常に暢達した方である。余は深く孔子に學んで其教訓を循守して往けば。家に處し世間に出でて非難せられざる熟達圓滿の人物になり得らるゝものと信ずるなり[16]。

【現代語訳】

さて孔夫子の人となりは、一言で言えば常識が非常に発達した円満な人というのが適評であろう。古来、世の所謂英雄や豪傑は常人に卓越した特色や長所があると同時にとびぬけた欠点や短所もあるものである。しかしながら、孔夫子に至っては特別な長所と言うべき所がない代りにここぞという短所もないのである。故にこれを称して偉大なる凡人といっても適当であろう。孔子も自ら次のようにいっている。「私は、若い時には身分が低かった、だから、つまらない事がいろいろとできるのだ」（金谷治注『論語』、岩波文庫、2001年169頁）と。世の中の事は、大抵、よく知っていないことはない。史記世家に六芸に通ずとある。六芸とは弓を射、馬を御し、字を書き、算術をなし、礼を行い、音楽を奏でることを指している。即ち何事にも堪能であったことを推測することができる。後年に至り春秋を著されているのを見れば、歴史の造詣もまた深かったことがわかる。そうであるので、人は釈迦やキリストとなることは難しいが、孔子となることはそれほど難しいことではない。なぜならば、私が非凡の釈迦やキリストになることができないとしても、平凡が発達した孔子になることができない理由はないからである。ただ勉めていやにならないだけである。要するに孔子は万事に精通して円満で何事にもとらわれないのである。すなわち、常識が非常にのびやかなひとである。私は深く孔子に学んでその教訓を守ってゆけば、家にいて、世間に出て非難されない熟達円満の人物になることができると信じている。

【本文】

孔子の教は宗教なりや。孔子は儒教の大宗[17]なり。孔子の教即ち儒教は宗教なりや否の問題は。論語の如何なるものであるかを講義する前に。先づ以て之を研究せざるべからず。文學博士井上哲次郎氏は。孔子の教は半ば宗教[18]で。少くとも宗教らしい所があると喝破し[19]。之に對して法學博士阪谷芳郎氏[20]は。全然宗教にあらず。單に實踐道德を説かれたに過ぎず[21]と駁論しき[22]。余は以爲らく。論語子罕篇に。

天之將喪斯文也。後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也。匡[23]人其如予何。（天の將に斯の文を喪ぼさんとするや。後れて死する者は。斯文に與ることを得ず。天の未だ斯の文を亡ぼさゞるや。匡の人夫れ予れを如何せむ。）

とあり。『斯文』とは。孔子が之を其時人に教へ、又後世に貽さんとする『先王の道』[24]を指したのである。即ち此章の意は。若し天が先王の道を滅さんとする意ならば。予れ（孔子）或は匡の國の人の手に罹りて殺さるゝかも知れぬ。然れども予が未だ予の事業の卒らぬ中に殺されてしまへば。後世の者は先王の道たる『斯文』を知ること能はざる

に至るべきを以て、先王の道を亡ぼしたくないとの天意あらば。『斯文』を傳ふるを以て天職とする予は。決して匡人輩の手を以て殺し得べき筈がないと云ふのである。即ち茲に孔子が天に對する信仰を言明して居る。其外爲政篇に『五十而知天命。』八佾篇に『獲罪於天無所禱也。』公冶長篇に『夫子之言。性與天道。不可得而聞也已矣』雍也篇の『予所否者。天厭之。天厭之。』述而篇に『天生德於予。桓魋其如予何。』泰伯篇に『堯之爲君也。巍々乎。唯天爲大。』憲問篇に『不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。』陽貨篇に『天何言哉四時行焉。百物生焉。天何言哉。』など論語全篇を通覽するに。天に言及した所が九ケ所ばかりある。殊に八佾篇の『罪を天に獲れば禱る所無し』と明言せられたるに徴すれば、孔子が天を深く信じ、之を其信條とせられたのは事自ら明かである。則孔子の教は慥に半は一の宗教なりと斷定せる井上博士の説も尤もな所がある。之に反對する阪谷博士の説は。凡そ宗教といふ宗教には必らず祈禱禮拜の形式を備へざるは無し。而るに孔子教即ち儒教には此形式を備へず。故に之を宗教視すべからずといふに在り。未だ遽かにその是非を斷定すべからずと雖も。余は儒教を以て宗教なりとは信じて居らず。唯實際身を修め世に處するに方つて。人の人たるべき規矩準繩[25]を説き視めされたる教として之を循守し。論語の所説に從ふて實踐躬行を努めて怠らざるのみである[26]。

【現代語訳】

孔子の教えは宗教であろうか。孔子は儒教の大宗である。孔子の教え即ち儒教は宗教であるかどうかの問題は、論語がいかなるものであるのかを講義する前に、先ずこれを研究しないわけにはいかない。文学博士井上哲次郎氏は、孔子の教えは半ば宗教で、少くとも宗教らしい所があると明言し、これに対して法学博士阪谷芳郎氏は、全く宗教ではなく、単に実践道徳を説かれたに過ぎないと非難した。私は思うに、論語子罕篇に、

天之將喪斯文也。後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也。匡人其如予何。（天の將に斯の文を喪ぼさんとするや。後れて死する者は。斯文に與ることを得ず。天の未だ斯の文を亡ぼさゞるや。匡の人夫れ予れを如何せむ。）

とあり、『斯文』とは、孔子がこれをその時の人に教え、又後世に残そうとする『先王の道』を指したのである。即ちこの章の意は、もし天が先王の道を滅ぼそうとする意志があれば、わたし（孔子）あるいは匡の国の人の手にかかって殺されるかもしれない。しかしながらわたしがまだ私の事業が終わらないうちに殺されてしまえば、後世の者は先王の道たる『斯文』を知ることができない。先王の道を亡ぼしたくないとの天意があったならば、『斯文』を伝えることを天職とするわたしは、決して匡人輩によってこ

ろされるようなことはないというのである。即ちここに孔子が天に対する信仰を明言している。そのほか爲政篇に『五十而知天命。』（五十にして天命を知る）八佾篇に『獲罪於天無所禱也。』（罪を天に獲れば禱る所無きなり）公冶長篇に『夫子之言。性與天道。不可得而聞也已矣』（夫子の性と天道とを言うは得て聞くべからざるなり）雍也篇の『予所否者。天厭之。天厭之。』（予が否き所の者は、天之を厭たん。天之を厭たん。）述而篇に『天生德於予。桓魋其如予何。』（天德を予に生せり。桓魋其れ予を如何。）泰伯篇に『堯之爲君也。巍々乎。唯天爲大。』（堯の君爲るや。巍々として唯だ天を大なりと爲す。）憲問篇に『不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。』（天を怨みず。人を尤めず。下學して上達す。我を知る者は其れ天か）陽貨篇に『天何言哉四時行焉。百物生焉。天何言哉。』（天何をか言うや。四時行われ。百物生ず。天何をか言うや）など論語全篇を通覧すると、天に言及した所が九ケ所ばかりある。特に八佾篇の『罪を天に獲れば禱る所無し』と明言しているのは、孔子が天を深く信じ、これを信条とされたのは明かである。則ち孔子の教えは慥に半ば一の宗教なりと断言する井上博士の説も尤もな所がある。これに反対する阪谷博士の説は、宗教という宗教には必らず祈祷礼拝の形式を備えないことはない。しかしながら、孔子教、即ち儒教にはこの形式を備えていない。故にこれを宗教とみることはできないといえる。まだその是非を断定することはできないが、私は儒教を宗教であるとは信じていない。ただ、実際、身を修め世に処する方法で、人の人たるべき規矩準繩を説き示したものとして守り、論語のいうところに従って実践を努めて怠らないだけである。

【本文】

さて孔子教は宗教とは信じて居らざるに拘はらず。何が故に斯く孔子の論語に親しみ。之を處世上唯一の信條となし。八十四歳の今日まで日常生活の規矩準繩となしたる乎と云へば。是には余が幼少の時より受けた教育から申述ねばならぬ事がある。明治維新前は京師も江戸も乃至は諸侯の國々も。すべて漢籍を以て教育を施し。余の鄉里武州[27]にては。初心の輩には千字文[28]三字經の類[29]を授け。それより四書を讀ませ五經に移り。文章物では文章軌範[30]とか唐宋八大家文[31]の如きものを讀み。歴史は國史略[32]支那の十八史略[33]或は史記の類を讀むを常とし。余は七歳の時に實父より三字經を教へられ。次に從兄の尾高蘭香[34]より大學、中庸、論語、孟子の四書句讀を授けられ[35]。其從兄の妹を後に娶つて[36]荊妻となした因縁にも依りて、論語に親しむ發端を開いたのである。

【現代語訳】

さて、孔子教は宗教とは信じていないのにも関わらず、何が故にこのような孔子の論語に親しみ、之を処世上の唯一の信条とし、八十四歳の今日まで日常生活の規矩準縄としたのかというと、これにはわたしが幼少の時より受けた教育から申し述べなければならない事がある。明治維新前は京都も江戸もないしは諸侯の国々も、すべて漢籍でもって教育を施し、私の郷里の武州では、初心者には千字文・三字経の類を授け、それから四書を読ませ五経に移り、文章物では文章軌範とか唐宋八大家文のようなものを読み、歴史は国史略、中国の十八史略、或いは史記の類を読むことを常とした。わたしは七歳の時に実父より三字経を教えられ、次に従兄の尾高蘭香より大学、中庸、論語、孟子の四書句読を授けられ、その従兄の妹を後に娶って 妻とした縁で、論語に親しむ発端を開いたのである。

【本文】

抑々均しく儒教を奉ずるにしても、大學もあり中庸[37]もあるに之を捨て。獨り論語を選んで遵奉するは。何ぞやと曰るゝ人もあらん。余が論語を選擇して一生恪循すべき規準となしたるは。大學は其開巻第一に明言するが如く[38]治國平天下の道を説くを主眼とし。修身齊家よりも寧ろ政治に關する教誨を重しとして居る。中庸は更に一層高い見地に立つて。「致中和。天地位焉。萬物育焉[39]。」（中和を致して、天地位し、萬物育す。）などの悠遠なる説があつて、哲學[40]に近く。修身齊家の道には遠ざかり居るが如し。而るに論語に至つては。一言一句悉く是れ日常處世上の實際に應用し得る教である。朝に之を聞き夕べに之を實行し得る底の道を説て居る。是れ余が孔夫子の儒教を遵奉するに膺り學庸に據らず。特に論語を選び拳々服膺して、終生敢て或は之に悖らざらん事を期する所以である。余は論語の教訓を守つて行けば。人は能く身を修め家を齊へ。安穏無事に世を渡つて往けるものと確信するのである[41]。

【現代語訳】

そもそも、一様に儒教を信奉するといっても、『大学』もあり『中庸』もあるのに、これらを捨てて、ただ、『論語』を選んで遵守するのは、なぜかと言う人もいるだろう。私が『論語』を選択して一生謹んでそれに従う規準としたのは、『大学』はその冒頭部分に明言されているように治国平天下の道を説くことを主眼とし、修身斉家よりも寧ろ政治に関して教え諭すことを重要としている。『中庸』は更に一層高い見地に立って、「致中和。天地位焉。萬物育焉。」（中和を致し。天地位す。萬物育す。）などの悠遠なる

説が書かれており、哲学に近く、修身斉家の道から遠ざかっているようにみえる。しかし、『論語』においては、一言一句すべて日常の処世上の実際に応用することができる教えである。朝に之を聞き夕べに之を実行することができる底の道を説いている。これが、わたしが孔子の儒教を遵奉するに当たって、『大学』『中庸』に拠るのではなく、特に『論語』を選びしっかりと心に留めて、終生、敢て或いはこれに悖ることの無いよう期している理由である。わたしは『論語』の教訓を守って行けば、人は身を修め家を斉えることができる。安穏無事に世を渡って行けるものと確信するのである。

【本文】

余は明治六年に官を退き[42]、身を實業に委ねる事になつた[43]。而して國を強くするには、先づ國を富まさゞるべからず國を富ますには、先づ農工商の實業を隆盛ならしめざるべからず。就中余は商工業を隆盛ならしむるには。小資本を集めて大資本となす合本主義[44]を行ひ。卽ち會社組織に據らざるべからずと信じて、敢て第一銀行を組織し其他各種の會社組織に微力を盡したのである。抑ゝ會社を經紀する[45]には。第一に必要なるは之を經紀する人物の如何にあるのである。其當局者に相當の人物を得ざれば。其會社は必らず失敗に終るべし。明治の初めに政府の創設したる開拓會社[46]とか爲替會社[47]とか云ふものが。大抵倒壞したのは卽ち其適例である。是に於て余は銀行や會社を失敗なく成功せしむるには。其事に任ずる當局者をして。事業上又は一身上恪循するに足る規矩準繩がなければならぬと考へたのである[48]。

【現代語訳】

わたしは明治六年（1873年）に大蔵省（大蔵少輔事務取扱）を辞め、この身を実業に委ねる事になった。しかし、国を強くするには、まず国を裕福にしないといけない。国を裕福にするためには、まず、農工商の実業を盛んにしないといけない。とりわけ、私は商工業を盛んにするためには、小資本を集めて大資本とする合本主義を取り入れ、つまり、会社組織によることを信じて、あえて、第一銀行を組織し、その他各種の会社組織に微力を尽くしたのである。もともと、会社を治めるには、第一に必要なことは会社を治める人物がどうするかにあるのである。当局に相当する人物を得ることができなかったら、その会社は必ず失敗に終わるだろう。明治の初めに政府が創設した開拓会社とか為替会社とかいうものが、だいたい倒産したのは、その適例である。そこで、わたしは銀行や会社を失敗なく成功させるには、そのことに任じられる当事者には、事業上、または一身上に準拠すべき基準がなければならないと考えたのである。

【本文】

余は佛教の知識なく耶蘇教に至ては更に知る所がない。そこで余が實業界に立ちて自ら守るべき規矩準繩は之を佛耶の二教に取ること能はず。而かも儒教ならば不十分ながら幼少の時より親んで來た關係があり。特に論語は日常身を持し世に處する方法を一々詳示せられて居るを以て。此に依據しさへすれば。人の人たる道に戻らず。萬事無碍圓通[49]し、何事にても判斷に苦しむ所があれば、論語の尺度を取つて之を律すれば、必ず過ちを免かるゝに至らんと確く信じたり。我邦には應神天皇の朝以來斯る尊き尺度が傳來し居るに[50]。之を高閣に束ねて[51]顧みず。範を他に覓めんとするは心得違の事にあらずや。余は斯く信じて論語の教訓を金科玉條[52]とし。拳々服膺して之が實踐躬行を怠らぬのである。實業家の循守すべき論語の教訓は。一にして足らずと雖も就中里仁篇の

富與貴。是人之所欲也。不以其道。得之不處也。貧與賤。是人之所惡也。不以其道。得之不去也。（富と貴とは是れ人の欲する所也。されど其道を以てせざれば之を得るも居らず。貧と賤とは是れ人の悪む所也。されど其道を以てせざれば之を得るも去らず。）

の如き其一例である。又同じ篇に。

放於利而行多怨。（利に依つて行へば怨多し）

の句がある是れは實業家の終身恪遵すべき明教にあらずや。人生の生活に先つものは財産金錢也[53]。之れなければ一日も立行かざるべし。人の地位も亦然り。成るべく上流に立たねば，世の信用少く思ふ事も就らざるべし。されど正當の道に依らず無理をして得たる富や地位は永續のせぬものぞかし。此反對にて如何に貧窮しても又如何に下賤の地位に居るもそれが自然に來れる運命ならば。致方なしと觀念して善行を積むより外に致方なし。無理に其境界を擺脱せんとすれば。必らず法を犯し人を害する底の悪業に陥るべし。自己の利益のみを主眼として行作すれば。必らず他人の怨恨する所となり非命[54]に斃るゝこともあるべし。是等の教訓は實に吾人の日常遵奉すべき好箇の明訓ではあるまいか[55]。

【現代語訳】

わたしは仏教の知識はなくキリスト教に至っては、さらに知っていることがない。そこでわたしが実業界に立って、自ら守るべき規範は仏教とキリスト教の二教にすることはできない。しかも儒教であるならば不十分ではあるが、幼少の時より親しんできた関係

がある。特に『論語』は日常で身を持し世渡りの方法をひとつひとつ詳細に示しているので、これを頼りにさえすれば、人の人たる道に背かず、すべてが妨げなくあまねく通じ達していて、何事にても判断に苦しむ所があれば、『論語』のものさしで処理すれば、必ず過ちを免れると固く信じている。我国には応神天皇の世以来、このような尊きものさしが伝来した。これを書物などを高い棚の上に束ねてのせたままほうっておき顧みることなく、規範を他に求めようとするのは心得違いのことではないだろうか。わたしはこのように信じて『論語』の教訓をよりどころとし、しっかりと心にとどめて、このことにより実践躬行を怠らないのである。実業家の守るべき『論語』の教訓は、たくさんあるが、中でも里仁篇の

富與貴。是人之所欲也。不以其道。得之不處也。貧與賤。是人之所悪也。不以其道。得之不去也。（富と貴とは是れ人の欲する所也。されど其道を以てせざれば之を得るも居らず。貧と賤とは是れ人の悪む所也。されど其道を以てせざれば之を得るも去らず。→富と貴い身分とはこれはだれでもほしがるものだ。しかし、それ相当の方法（正しい勤勉や高潔な人格）で得たのでなければ、そこに安住しない。貧乏と賤しい身分とはだれもがいやがるものだ。しかし、それ（貧賤になってしまった状況下では）其の道を以てする以外に致し方ない（＝「致方なしと觀念して善行を積む」しかない）のだ、無理に脱しようとしても法を犯し人を害するような悪行に陥るだけ（で貧賤から脱出などできない）、それも避けない。）

のようなものがその一例である。又同じ篇に、

放於利而行多怨。（利に依つて行へば怨多し→利益ばかりにもたれて行動していると、怨まれることが多い[56]。）

の句がある。これは実業家が終身守るべき立派な教えではないだろうか。人生の生活に先立つものは財産金銭である。これがなければ一日も立ち行かない。人の地位もまたそうである。成るべく上流に立たねば、世の中の信用は少く思う事も成就することができない。そうではあるが正しい道によらず無理をして得た富や地位は永く続くものではないであろう。これの反対でどれほど貧窮であっても、またどれほど下賤の地位にいてもそれが自然に来た運命であれば、致し方なしと観念して善行を積むより外（ほか）に致し方ない。無理にその境界を取り除こうとすれば、必ず法を犯し人を害するような悪業

に陥るであろう。自分の利益のみを主眼として行動すれば、必ず他人の怨恨する所となり非業の死を迎えることもあるであろう。これらの教訓は実に我々の日常で守るべき丁度よい明訓ではないだろうか。

【本文】

總説の終りに臨み一言せざるべからざるものは、儒教と經濟[57]との合致卽ち教と行と合一不二の物となす事である。儒教卽ち孔子の教は固より紙上の空談高論にあらず。一々之を日常生活の上に實行すべき道である。人は血液の循環する生物なれば、衣食住の欲求なかるべからず。衣食住の給與は則ち經濟の道に依らざるべからず。故に人道も禮節も經濟を離れて行はるべきものにあらず。故に衣食足而知禮節との古訓あり[58]。食ふ事も衣る事も出来ぬ人に向つて仁義忠孝の道を行へ禮儀を行へと言ふ事は出來まい。今論語の説く所は悉く人間實際の生活を離れず。名教[59]と實用とを一致合同して居るが、宋儒程子[60]や朱子の解釋高遠の理學[61]に馳せて、稍々實際の行事に遠ざかるに至れり。我邦の儒家藤原惺窩、林羅山の如き宋儒の弊を承けて。學問と實際とを別物視し。物徂徠[62]に至ては學問は士大夫以上の修むべきものなりと明言して[63]。農工商の實業家をは圈外に排斥したりき。德川氏三百年の教育は。此主義に立脚したりしかば。書を讀み文を學ぶは實業に與らざる士人の業となり。農工商多數の國民は國家の基礎たる諸般の實業を擔任すれども、書を讀まず文を學ばずして無智文盲漢となり了りぬ。因習の久しき習ひ性となり。事業と學問とは全く別物となりて人敢て恠まず。士は高く止りて農工商を下民と賤しみ。農工商は士人の自活自存する道を知らざるを嘲りて、青表紙讀み[64]四角の文字知り[65]と罵れり。人類の均しく服膺すべき論語の明教を。獨り少數士人の教訓に委したるは。惜みても猶惜むべき事ぞかし。余は堅く信ず。學問は學問の爲めのみの學問にあらず。人間日常生活の指南車[66]たらんが爲めの學問なり。卽ち學問は人生處世上の規準也。故に實際を離れたる學問なきと同時に。學問を離れたる實業も亦存せざる也。是を以て余は平生論語と算盤説を唱へて實業を論語に一致せしめんと企圖し。余が尊信する故三島中洲先生とは同工異曲[67]とでも云ふべきか。論語を經濟に合一せしめんと説かれき[68]。

【現代語訳】

総説の終わりに臨み、一言、言っておきたいことは、儒教と経済との合致は、つまり教えと行いを二つに分けられない一つのものとすることである。儒教は、すなわち孔子の教えはもともと紙上の空談高論ではない。ひとつひとつ、これを日常生活において実行

すべき道である。人は血液の循環する生物であるので、衣食住の欲求がないはずはない。衣食住の付与は、とりもなおさず、経済の道に依らざるをえない。ゆえに人道も礼節も経済を離れて行われるべきものではない。ゆえに衣食足って礼節を知るとの古訓がある。食べることも着ることも出来ない人に向かって仁義忠孝の道を行え、礼儀を行えと言う事は出来ない。『論語』の言う所はことごとく実際の世間の生活を離れない。名教と実用とを一致合同しているが、宋の儒家である程子や朱子の解釈は、はるか遠い理学に馳せて、やや実際の物事から遠ざかっている。我が国の儒家である藤原惺窩、林羅山のような人たちは宋儒の弊害を承けて、学問と実際とを別物とみなしていた。荻生徂徠に至っては学問は士大夫以上が修めるべきものであると明言して、農工商の実業家を圏外に排斥した。徳川氏、三百年の教育は、この主義に立脚したので、書を読み文を学ぶのは実業を行わない士人の業となり、農工商多数の国民は国家の基礎である諸々の実業を任されているが、書を読まず文を学ばずに無智文盲漢となってしまい、長く続く因習として習い性となって事業と学問とが全くの別物となったことを人は敢て怪しみもしない。士は高く止まって農工商を下民と軽蔑した。農工商は士人が自活自存する道を知らないことを嘲り、漢字ばかり読んでいる堅物と罵った。人類の均しく頼りとすべき論語の明るい教えをただ、少数の士人の教訓にゆだねるのは、惜んでも猶お惜むべき事であろう。わたしは堅く信じている。学問は学問のためのみの学問ではない。人間日常生活の指南車となるための学問である。すなわち学問は人生の処世上の規準である。故に実際を離れた学問がないのと同時に、学問を離れた実業もまた存在しないのである。これにより、わたしは平生、論語と算盤説を唱えて実業を論語に一致させようと企図する。わたしが尊信する故三島中洲先生とは同工異曲とでもいうべきか。論語を経済に合一しようと説かれた。

【本文】

之を要するに中洲先生も余も共に學問と事業とを結び付けて、睽離[69]せしめず以て知行合一[70]の極致に到達せんと欲するなり。余は實に此知行合一の見地に立ちて、論語を咀嚼し八十四歳の今日まで公私内外の規準として遵奉し、國を富まし國を強くし以て天下を平かにするに努力したり。他の同胞實業家にも論語を能く讀て貰ひ。民間に知行合一の實業家續々輩出して。品位の高き先覺者が出現せん事を望むのである。是を以て余は不學にして。固より專門の漢學者[71]にあらざれども敢て自ら揣らず。茲に論語の講義をなさんと欲す。大方の諸士 幸 に余の諛劣[72]を咎めず。愛讀の榮を賜り共に輿に東洋の仁義道德を鼓吹して身を修め世に處する規矩準繩となされん事を願ふのみ。重ね

て一言すれば名教學術は實業に依つて貴く、農工商の實業は名教道德に依つて光を發す。二者固より一致にして。決して相睽離する事を許さず。若し二者睽離せんか。學問は死物となり。名教も道德も紙上の空談となり。論語讀の論語知らずと曰はるゝに至るべし。又農工商人は思想低下の賤丈夫となり。光輝なき實業となり了らむ。是を以て二者を一致せしめ。知行合一の境に達せしめん事を願ふて息まず。此主義を抱き八十年來の實驗に據つて敢て論語を講説す。而かも余は多忙の身にして躬ら筆を執る事能はざるが故に口話して尾立維孝氏之を筆述する事となしぬ。讀者請ふ之を諒せよ。

【現代語訳】

要するに中洲先生も余も共に学問と事業とを結び付けて、バラバラに分離せずにいると、知識と実践とが合わされた一致の極致に達する。余は実に知行合一の見地に立って、論語をわかりやすく理解して、八十四歳の今日まで公私内外の規準として守り、国を富ませ、国を強くして、泰平にする努力をした。他の同胞の実業家にも論語をよく読んで貰い、民間に知行合一の実業家を続々と輩出して、品位が高い先導者が出現する事を望むのである。そうであるので、余は不学であって、もともと専門の漢学者ではないけれども、あえて、自らの分も弁えず、ここに論語の講義をしようと思った。大方の諸士は、幸いに余の浅はかであることを咎めず、愛読の栄誉を賜り、ともに東洋の仁義道德を広め、身を修め世に処する基準なることを願うだけだ。重ねて一言すれば素晴らしい教えと学術は実業によって貴く、農工商の実業は素晴らしい教えと道德に依って光を発する。二者は元来一致していて、決して互いに離れることを許さない。もし、二者が離れ離れになったらどうか。学問は死物となり、素晴らしい教えも道德も紙上の空談となる。論語読みの論語知らずといわれるようになった。さらに、農工商人は思想が低下した卑しい丈夫となるだろう。光り輝くことのない実業となり終わる。そうであるので、二者を一致させ、知行合一の境地に達しようとする事を願ってやまない。この主義を抱き八十年来の経験によって、あえて論語を講説した。しかも余は多忙の身にして自ら筆を執る事ができないので、口話して尾立維孝氏が筆述する事となった。読者にこのことを理解してほしい。

重信　あゆみ（大阪公立大学　客員研究員）
池内　早紀子（大阪府立大学大学院博士後期課程）
山本　優紀子（立命館大学衣笠研究機構　客員研究員）
（順不同）

謝辞

本稿を作成するにあたり、丁寧にご指導いただいた立命館大学教授・大阪府立大学名誉教授大形徹先生に心より感謝いたします。また、日頃より本勉強会に参加、ご協力いただきました林みどりさん、周寧寧さん（広州軟件学院）に感謝の意を表します。

［注］

1　『論語講義』に関しては、笹倉一広氏が「渋沢栄一『論語講義』の書誌学的考察」の中で、「三島中洲の『論語講義』と渋沢の『実験論語処世談』に主に基いて、尾立が起草したものである」ことを明らかにした。さらに、同氏は「現在通行している渋沢『論語講義』は尾立の起草稿のままである」（笹倉一広「「渋沢栄一『論語講義』原稿劄記（1）論語総説」、一橋大学語学研究室『言語文化』49号、2012年、110頁」と『論語講義』が尾立が作成した原稿をそのままで刊行したことを示している。そのうえで、笹倉氏は「渋沢栄一『論語講義』原稿劄記（1）論語総説」で「渋沢の書き入れを翻字し、初めて明らかにするとともに、刊行されている渋沢『論語講義』と、《稿本》や渋沢の書き入れを比較し、考察を加える」（同）と、刊行されている『論語講義』について、書誌的な比較考察を行っている。しかし、その本文の注釈までは行われていない。本稿では、笹倉氏の論稿を踏まえ、本文に注釈をつけていく。

2　『先秦諸子繫年』に「翟灝四書考異亦辨之云、陳蔡之厄、孔子年六十三。子張少孔子四十八歳、時才十五歳也。史文豈可盡信。今按、孔子六十八返衛、子張亦纔二十歳。則其從遊、蓋在孔子自衛歸魯之後。」とある。『四書考異』には「國蔡之厄孔子年六十三子張少孔子四十八歳時才十五歳耳先進篇備錄從陳蔡者十人未有子張史文可盡信哉」と記載されていた。

3　孔子以詩書禮樂教、弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人。（孔子詩書礼楽を以て教え、弟子蓋し三千、身に六芸に通ずる者七十有二人なり。『史記』孔子世家）

4　「王道」について、『史記』孔子世家に「孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音。禮樂自此可得而述、以備王道、成六藝」とある。（孔子皆之を弦歌し、以て求めて韶武雅頌の音を合す。礼楽此れ自り得て述ぶるべく、以て王道を備え、六芸を成す。）

5　渋沢栄一、84歳の時（1924年）には、国際関係の会議、福祉関係の会議に多く出席している。その中で、儒教の関係では、湯島聖堂の再建について協議が行われている。渋沢栄一の年表は、以下を参照した。

https://www.shibusawa.or.jp/SH/kobunchrono/ch1924.html

6　「修身斉家」は、『大学』「古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先**齊其家**。欲齊其家者、先**修其身**。欲修其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。物格而後知至。知至而後意誠。意誠而後心正。心正而後身修。身修而後家齊。家齊而後國治。國治而後天下平。自天子以至於庶人、壹是皆以修身為本。其本亂而末治者否矣。其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。此謂知本、此謂知之至也。（古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は、先ず其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先ず其の家を齊う。其の家を齊えんと欲する者は、先ず其の身を修む。其の身を修めんと欲する者は、先ず其の心を正しくす。其の心を正しくせんと欲する者は、先ず其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先ず其の知を致す。知を致すは物に格る在り。物格り後知至る。知至りて後意誠なり。意誠して後心正し。心正しくして後身修まる。身修まりて後家齊う。家齊いて後國治まる。國治まりて後天下平らかなり。天子自り以て庶人に至るまで、壹是に皆身を修むるを以て本と為す。其れ本亂れて末治まる者は否ず。其の厚くする所の者は薄くして、其の薄くする所の者厚きは、未だ之れ有らざるなり。此を本を知ると謂う。此を知の至りと謂うなり。書き下しは、矢羽野隆男『大学・中庸』、角川ソフィア文庫、2016年、37頁、68頁参照）

7　大正４年１月23日（1915年）
是ヨリ先、東京市内ニ電灯及ビ電力ヲ供給セル東京市電気局・東京電灯株式会社及ビ日本電灯株式会社ノ間ニ競争ヲ生ジ、漸ク之ガ激烈トナルニ及ンデ統一ノ機運促サレ、栄一及ビ森村市左衛門其仲介ヲ委嘱セラル。是日渋沢事務所ニ三者ノ代表ヲ招キテ電灯市営統一案ヲ呈示ス。然レドモ東京電灯株式会社ノ不同意ニ依リ遂ニ交渉不調ニ終ル。
（https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/index.php?DK530054k_list）

8　この年（1924年）、アメリカでは５月に排日移民法が成立した。

9　渋沢栄一は日華実業協会に度々出席し、学芸大学設立の協議を行っている。「是より先、上海中華学芸社に於て学芸大学設立を計画し、同籌備委員会委員長王兆栄より当協会に対し、其設立資金の援助方依頼あり。之と前後して、上海総商会会長宋漢章・副会長方積蕃より、我国に於ける中華民国人労働者の入国制限緩和方につき要請あり。是日、当協会幹事会を開き、右二件に関し協議す。栄一、会長として出席す。次いで二十一日、三十日及び七月九日の幹事会に於て、継続協議を行ふ。栄一、それぞれ出席す。」（『渋沢栄一伝記資料』巻55、p.277-292）

10　この段に関して笹倉氏は「『実験論語処世談』11頁の「◎渋沢にも孔子の志あり」（大

正４年６月掲載）の章に拠る。特に注意すべき渋沢の書き入れはない」（笹倉一広「渋沢栄一『論語講義』原稿劄記（1）」、『言語文化』49巻、2012年、119頁）と記載している。そこで、『実験論語処世談』「◎渋沢にも孔子の志あり」を確認すると、以下の通りであった。

老いて六十八歳になるまでも政治上の事に恋々せず、早く見切りをつけて門弟子の教育に意を注ぎ、道を伝へるのに力を尽してた方が孔夫子の為に利益であつたらうにと思はるゝ方々があるやうに、私なぞにも余り世間の事に関渉せず、既に老人のことであるから、静かに引き籠つて修身斉家の道を説くだけぐらゐに止めてたら可からうと思はるゝ方もあらう。然し私は敢て僭して自ら孔夫子を以て任ずるわけでは素よりないが、孔夫子が若しや、自分が出たら其国の政治が良くなるかも知れぬと思うて、召されさへすれば何処にでも出て仕へたやうに、老人の私でも出て奔走すれば、若しや少しでも世間の御役に立つ事が出来やうか、と思ふ心があるものだから、電灯問題が起れば之に顔を出したり、米国の問題があると云へば夫れにも関係をしたり、対支交渉の事件が起つたとなれば、之にも亦顔を出したりするやうになるのである。要は、孔夫子が其志に忠なりし所を学んで、多少なりとも国利民福の為に貢献したいとの精神に外ならぬのである。

11　孔子の人格については井上哲次郎が『倫理と教育』（弘道館、1908年、第十八　孔子の人格に就いて）の中で「円満」と言及している。

12　『論語』子罕篇に「吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。（吾れ少くして賤し。故に鄙事に多能なり。君子、多ならんや。多ならざるなり。）」とある。（金谷治注『論語』、岩波文庫、2001年、168頁）

13　上掲、註３参照。

14　『史記』孔子世家に「子曰、弗乎弗乎、君子病没世而名不稱焉。吾道不行矣、吾何以自見於後世哉。**乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公**。據魯、親周、故殷、運之三代。約其文辭而指博。故吳楚之君自稱王、而春秋貶之曰、子、踐土之會實召周天子、而春秋諱之曰、天王狩於河陽。推此類以繩當世。貶損之義、後有王者舉而開之。春秋之義行、則天下亂臣賊子懼焉。孔子在位聽訟、文辭有可與人共者、弗獨有也。至於為春秋、筆則筆、削則削、子夏之徒不能贊一辭。弟子受春秋、孔子曰、後世知丘者以春秋、而罪丘者亦以春秋。」（子曰く、弗乎弗乎、君子世に病没し名称さず。吾の道不行われず、吾何ぞ以て自ら後世に見わるるかな。**乃ち史記に因りて春秋を作り、上隱公に至り、下哀公十四年に訖り（いた）、十二公なり。**魯に據りて、周に親く、殷に故にし、三代を運らす。其の文辞を約して博を指す。

故に吳楚の君自ら王を称するも、春秋之を貶けて曰く、子、践土の会実は周の天子を召し、春秋之を諱りて曰く、天王河陽に狩りすと。此れ類を推して以て当世を縄す。貶損の義、後に王者挙げて之を開ける有り。春秋の義行わるれば、則ち天下の乱臣賊子懼る。孔子位に在り聴訟し、文辞にと人共にすべきもの有れば、独り有らざるなり。春秋を為すに至りて、筆すれば則ちし筆、削すれば則ち削し、子夏の徒一辞を賛すること能わず。弟子春秋を受け、孔子曰く、後世丘を知る者は春秋を以てし、丘を罪する者も亦春秋を以てす）

15 完全にかぎりなく満たされ、さえぎるもののないこと。形でいえば、満月のようにまんまるいこと。教えの最もすぐれていることの喩え。（『例文 仏教語大辞典』）

16 この段について笹倉氏は「この段は『実験論語処世談』12頁の「◎円満なる孔夫子」の章に拠る。『実験論語処世談』では最後に新注古注の解説があるが，すでに述べられていのので割愛されている」と述べている。（笹倉一広「渋沢栄一『論語講義』原稿劄記（1）」、『言語文化』49巻、2012年、120頁）そこで、『実験論語処世談』を確かめると、以下のように記載されていた。

兎角古来、英雄とか、豪傑とか称せらるゝ人々には、他に抽んでた非凡の長所特色がある代り、又同時に、大きな欠点の見出され得るものである。然るに、孔夫子には是れが非凡の長所であると特に指し得るものゝ無いと同時に、又一つの欠点さへ無いのである。総てが皆な円満に発達し、総てが非凡であると共に総てが平凡である、全く欠点が無いのである、之を称して偉大なる平凡とでも云ふべきものであらうかと思ふ。孔夫子も自ら卑事に通じて居ると申されたほどで、何一つ世の中の事で知らぬといふものは無かつたのである。「史記世家」にもある如く、六芸に通じて、馬を御したり、弓を射る事さへ心得られて、何事も行き亘つて居られた。論語の「郷党」篇にもある如く、孔夫子が大廟に入ゝらる［入らるゝ］や、事毎に問うて教を受け、後に始めて進退せられたものだから、傍にあつた者が若しや大廟の礼を孔夫子が心得て居られぬのかと尋ねて見ると爾うでは無い、斯く事毎に問うて後に進退するのが即ち大廟に於ける礼であると答へられたほどで、礼楽は素より申すまでもなく、後年には「春秋」を著されて歴史に対する造詣も頗る深くあらせられたのを示して居られる。

要するに孔夫子は欠点なく何事にも精通した頗る円満な人物で、常識の非常に発達せられた方である。依て、私は孔夫子に学んで論語にある教訓を遵奉してさへゆけば、世間に出でゝ非難の無い常識の発達した人物になり得られるものと信ずる。又孔夫子の教訓は大なる常識に外ならぬものであるから、誰でも学んで実践躬行し

得られるものである。

斯の孔夫子の教は孔子より孟子に伝へられ、其後、韓退之なども之を伝へたやうであるが、一時余り世に行はれず、宋の時代になつてから其の復興を見るに及び、朱子の如き学者が現はれて四書の「朱子集註」の如きものを見るに至つたのである。然し、之より先に「古註」といふものもある。日本には、古註本も朱子集註本も共に渡来したが［、］徳川時代には、朱子集註が最も博く行はれたものである。

17　宗；『漢書』芸文志「儒家者流……游文於六經之中，留意於仁義之際，祖述堯舜，憲章文武，宗師仲尼」

18　宗教；『封神演義』の中に「宗教」と出てくる。

19　井上哲次郎は、『哲学と宗教』（弘道館、1915年）の中で「東洋では古來孔子の教を本じて居りましたが、孔子も決してさう云ふ宗教的情操のなかつたのではない。唯丶宗教的發達しなかつたからして、宗教のやうに見えなかつたのであります。それで成立宗教と區別して居りますけれども、根本的に區別することは出來ない。何故ならば孔子は『罪を天に獲れば禱る所なし』と云つて居る。即ち天を信じて居つた。其處に確に偉大なる宗教的信念があります。孔子の信念の如何に深かつたかと云ふことはそれで解るのであります。（529頁）と、宗教と孔子の教えを根本的には区別できないことを述べている。

20　1863年～1941年。父は阪谷朗廬（儒学者）。東京英語学校、大学予備門を経て、明治17年（1884）東京大学文学部政治学理財学科卒。同年大蔵省入省。主計局長、大蔵次官を務めた。39年１月から41年１月までの間、第１次西園寺内閣蔵相の任にあって日露戦争時の財政処理・戦後経営に手腕を発揮した。45年から大正４年（1915）まで東京市長、６年から昭和16年（1941）まで貴族院議員（男爵議員）を歴任。専修大学の学長も務めた。法学博士。渋沢栄一の女婿。（https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/454.html　国立国会図書館、近代日本人の肖像参照）

21　阪谷芳郎が具体的にどのように発言したのかは、管見の限りわからなかった。ただ、帰一協会第一回例会（1912年７月10日）で阪谷が宗教と教育及び家族に関する談話をしたことが『帰一協会会報』に記載されている。（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』第46巻、435頁）

22　姉崎正治、浮田和民、渋沢栄一などが中心となって帰一協会では「信仰問題」「風教問題」「教育と国民道徳の関係」「社会・経済・政治問題（精神的方面より観たる）」「国際並びに人道問題」を主題として研究発表が行われた。「儒教倫理の特質並にその実状」は、「信仰問題」の中に含まれている。（デジタル版『渋沢栄一伝記

資料』第46巻、433頁）比較的早い段階で成立した『史記』には「儒教」という語が見える。

23 春秋衛地。在今直隷長垣縣西南。［論語子罕］子畏於匡。［後漢書郡国志］長垣有匡城。

24 ① 『論語』述而篇には本文中に「子以四教、文行忠信」と「文」が四つの教えの一つであることを記載している。これに対して、疏に「文謂先王之遺文、行謂德行、在心爲德、施之爲行。中心無隠謂之忠、人言不欺謂之信、此四者有形質、故可舉以教也」（文は先王の遺文を謂い、行は德行を謂い、心に在りて德と爲し、之を施して行と爲す。中心に隠無く之を忠と謂い、人言欺かず之を信と謂い、此れ四は形質有り、故に以て教を舉ぐべきなり）とある。

② 「文」に関して、馬融は「文者、古之遺文」（文は、古の遺文）と学而篇の中で注している。

③ 何晏の『論語集解』には「天之將喪斯文也。後死者不得與於斯文也。天之未喪斯也。」の部分に関して、「孔曰、文王既沒、故孔子自謂後死。言天將喪此文者、本不當使我知之、今使我知之、未欲喪也。」（孔曰く、文王既に沒し、故に孔子自ら後死を謂う。言は天將に此の文を喪ぼさんとする者は、本當に我をして之を知らしむべからず、今我をして之を知らしめ、未だ喪ぼさんと欲さざるなり。）と注している。

④ 朱子は『論語集注』の中で、「文」を「道之顯者謂之文、蓋禮樂制度之謂」（道の顯わるる者之を文と謂い、蓋し禮樂制度之れ謂う）と註している。

⑤ 金谷治は「文」に関して、「文化」と訳している。（金谷治訳注『論語』岩波書店、2001年、168頁）

25 『孟子』離婁上に「繼之以規矩準繩、以爲方員平直、不可勝用也。」とある。

26 この段について笹倉氏は「儒教が宗教か否かの議論である。この段の「卽ち茲に孔子が天に對する信仰を……」の前までは『実験論語処世談』７頁の「◎孔子教は宗教なりや」を，以下はそれに続く同８頁の「◎論語に九ヶ所の天」の章をほぼそのまま書き改めたものである。渋沢がやや長く書き改めている箇所も，もともと『実験論語処世談』の言葉であり，尾立の筆ではない」と記述している。（笹倉一広「渋沢栄一『論語講義』原稿劄記（1)」、『言語文化』49巻、2012年、122頁）そこで、『実験論語処世談』を確かめると、以下のように記載されていた。

「論語の如何なるものであるかを説く前に、一つ考へて置かねばならぬ事は、孔子の教即ち儒教なるものは宗教なりや否やの点である。目下のところ我が邦に於て

之に対する意見が二派に別れて居る。文学博士井上哲次郎氏は孔子教は半ば宗教で、少くとも宗教らしい処のものであると主張せられるが、之に反対して法学博士阪谷芳郎は、否な全然宗教ではない、孔夫子は単に実践道徳を説かれたものに過ぎぬと論駁し、今なほ論戦酣で、何れとも決定せられたわけでない。

論語「子罕」篇に、

天之将喪斯文也。後死者不得与於斯文也。天之未喪斯文也。匡人其如予何。

（天の将に斯の文を滅ぼさんとするや遅れて死する者は斯の文に与ること得ず、天の未だ斯の文を亡さゞるや匡人夫れ予を如何せむ）

とあるが、この章句にある「斯文」とは、孔夫子が之を其当時の世に伝へ、又後世に遺さんとせられた「文王の道」を指したもので、この一章の意は聖人の道を滅ぼさんとするのが若し天意ならば、予（孔夫子）或は匡の人々の手によつて殺さるゝかも知れぬ。然し予（孔夫子）が未だ其事業を卒らぬうちに殺されてしまへば、後世の者は聖人の道たる「斯文」を知り得られない事になるから、聖人の道を滅ぼしたく無いとの天意のある中は、「斯文」を伝ふるを以て天職とする予（孔夫子）は、決して匡の人々の手によつて殺さるべき筈のものでないといふにある。この処に、孔夫子が天に対する信仰のあつた事がほの見えて居る。」

27　武蔵国。

28　『隋書』経籍志に「千字文 一卷梁給事郎周興嗣撰。千字文 一卷梁國子祭酒蕭子雲注。千字文 一卷胡肅注。篆書 千字文 一卷演 千字文 五卷草書 千字文一卷」と記載されている。また、『古事記』中巻によると、「故受命以貢上人名和邇吉師、即論語十卷千字文一卷幷十一卷、付是人即貢進」と応神天皇期に『論語』ともに『千字文』が日本に伝えられたことが記載されている。

29　三字経は『清史稿』に「醫學三字經四卷」「聚村童五六人、授以三字經」と記載がある。

30　序文に「宋謝枋得氏取古文之有資於場屋者自漢迄宋七十有六篇摽揭其篇章句字之法名之曰文章軌範」とある。（宋謝枋得編、明李廷機評『正文章軌範百家評林注釈』正徳５年（1715）刊）

31　『明史』に「茅坤唐宋八大家文鈔一百四十四卷」と記載されている。また、四庫全書提要に「考明初朱右。已採錄韓柳歐陽曾王三蘇之作。爲八先生文集。實遠在坤前。然右書今不傳。惟坤此集。爲世所傳習。凡韓愈文十六卷。柳宗元文十二卷。歐陽修文三十二卷。附五代史鈔二十卷。王安石文十六卷。曾鞏文十卷。蘇洵文十卷。蘇軾文二十八卷。蘇轍文二十卷。」と記載されている。

32　江戸後期の歴史書。五巻。岩垣松苗著。文政九年（一八二六）刊。神代から天正一六年（一五八八）後陽成天皇の聚楽第行幸まで、編年体による歴史を漢文で述べ、有名な人物の略伝や著書を付記したもの。谷寛得撰、小笠原勝修補の「続国史略」が書き継がれた。（日本国語大辞典）

33　元曾先之撰。

34　尾高惇忠について、『竜門雑誌』（第三〇六号・第三〇―三四頁〔大正二年一一月〕【青淵先生懐旧談】）の中で、「尾高惇忠と云ふのは、父晩香の実姉阿八重が、隣村手計村の吏正尾高勝五郎《(里正尾高勝五郎)》（保孝）に嫁し、数人の子を生んだ、惇忠は其の第三男で、通称を新五郎と云ひ藍香と号した、この人は私の従兄であり、私の先輩であり、私の師匠で且つ義兄である。私の一身上には非常に重大な関係があるから、別に後に詳しく述べる事とするがこの藍香は非常の天才で、七歳の頃四書の句読を受くる時から夙く頴敏の誉を得同時に書法を伯舅渋沢氏に学び、更に遊歴儒者として此村に来れる菊地菊城に就て経義を講じたのみ、殆んど独学でやつたのであるが、却々の学者として近郷に隠れなき声名を博してゐた」とある。

35　塚原蓼洲『藍香翁』のなかで、「私が最初に教はつたのが論語で。それから孟子。所謂る四書五経、小学、と上げて、更に文選、史記、漢書。又たそれに取り交《ませ》て十八史略、国史略、日本外史、日本政記などゝ読んで貰つた」とある。（17～18頁〔明治四二年三月〕

36　「安政五年戊午十二月七日（1858年）尾高勝五郎第三女千代子ヲ娶ル」（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』第１巻）

37　『中庸』は、『漢書』芸文志に「中庸説二篇」とある。このことに関して、唐の顔師古は、「今禮記有中庸一篇、亦非本禮經、蓋此之流。」と注している。また『四庫全書提要』には「定著四書之名。則自朱子始耳。原本首大學。次論語。次孟子。次中庸。書肆刊本。以大學中庸篇頁無多。併爲一册。遂移中庸於論語前。明代科舉命題。又以作者先後移中庸於孟子前。」と中庸の位置づけの変遷を述べている。『史記』孔子世家には「子思作中庸」と記載されている。

38　古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先修其身。（『大学章句』）

39　天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。道也者、不可須臾離也、可離非道也。是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其獨也。喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者，天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉。（天の命ずるを之性と謂う。性に率（し

たが）うを之道と謂う。道を修むるを之教えと謂う。道なる者は、須臾も離る可からざるなり。離るる可きは道に非ざるなり。是故に君子は其の睹（み）ざる所に戒愼（かいしん）し、其の聞かざる所に恐懼（きょうく）す。隱れたるより見（あらは）るるは莫く、微（かすか）なるより顯わるるは莫し。故に君子は其の獨を愼しむなり。喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂う。發して皆節に中（あた）る之を和と謂う。中なる者は、天下の大本なり。和なる者ものは、天下の達道なり。中和を致して、天地位し、萬物育す。金谷治『大学・中庸』岩波文庫、1998年）

40　西周（1829年-1897年）が「philosophy」を「哲学」と翻訳した。（サレバデゴザル、教ニハ元ヨリ觀行ノ二門ヲ分ツテ論ゼネバナラヌ┐デ、其行門ハ專ラ性理上ニ本イテ法ヲ立テタ者デゴザレバ、物理ノ論ニハ及バヌ┐デゴザルナレ┃モ、觀門ノ方デハ物理ヲ參考致サナクテハナラヌ┐デゴザル、併シ物理ト心理トヲ混同シテ論ジテハナラヌ┐デゴザルガ、其物理ヲ參考致サナクテハナラヌト申スノハ、人間モ天地間ノ一物デゴザレバ、物理ヲ參考致サナクテハナラヌデゴザル、是ハ物理ト申ス内ニモ彼ノ造化史ノ學ヲ主トスル┐デゴザツテ、其造化史ハ先ヅ金石、草木、人獸ノ三域ニ就テ諸種ノ道理ヲ論ジ、傍ラ地質學（ゼオガラヒー）、古體學（パレントロジーナ）ドト分レテ、此大地ノ出來タ初メニ反リ、又人獸ノ部ニテハアントロホロジー、譯シテ人性學ト云ヒ、先ヅ比較（コムペレーチフ）ノ解剖術（アナトミー）ヨリ生理學（ヒシヨロジー）、性理學（ピシコロジー）、人種學（エトノロジー）、神理學（テオロジー）、善美學（エステチーキ）、又歴史等ヲ總べ論ズル學術ヲ取別ケ物理ノ參考ニ備ヘネバナラヌ┐ゴザル、總テ箇様ナ┐ヲ參考シテ心理ニ徵シ、天道人道ヲ論明シテ、**兼テ教ノ方法ヲ立ツルヲヒロソヒー、譯シテ哲學ト名ケ、**西洋ニテモ古クヨリ論ノアル┐デゴザル、今百教ハ一致ナリト題目ヲ設ケテ、教ノ┐ヲ論ズルモ種類ヲ論ジタラバ此哲學ノ一種トモ云フベクシテ、仔細ハ若シ一ツノ教門ヲ奉ゼバ其教ヲ是トシ、他ノ教ヲ非トスル┐常ノ事ナルニ、百教ヲ槩論シテ同一ノ旨ヲ論明セントニハ餘程岡目ヨリ百教ヲ見下ヲロサネバナラヌ┐デゴザル、故ニカヽル哲學上ノ論デハ物理モ心理モ兼ネ論ゼネバナラヌ事デゴザルガ、兼ネ論ズカラト云ツテ、混同シテ論ジテハナラヌデゴザル（『百一新論』巻之下29）（『百一新論』巻之下）

41　『実験論語処世談』（デジタル版）には「同じく孔子の教を遵奉するにしても、強ひて単り論語に拠る必要は無からう、大学は如何、中庸は如何との念を懐かゝ方々も無いでなからうが、大学は其冒頭にも、古之欲明明徳於天下者。先治其国。（古の明徳を天下に明にせんと欲する者は、先づ其の国を治む）とあるほどで、治国平

天下の道を説くのを主眼とし、それから逐次斉家修身に及び、何れかと申せば政治向に関する教訓が主である。中庸の説く処には又一段高い立脚地に立つて観察した意見が多く致中和、天地位焉。万物育焉。（中和を致せば天地位し万物育す）とか、鳶飛戻天、魚躍于淵（鳶飛んで天に到り、魚淵に躍る）などの句があるほどで、何れかと申せば哲学的である。修身斉家の道には稍ゝ遠い恨みがある。然し論語となると、悉く是れ日常処世の実際に応用し得る教とでも申すべきもので、朝に之を聞けば夕べに直ぐ実行し得らるゝ道を説いてある。殊に「郷党」篇の如きに於ては、寝るから起るまで飲食の事より衣服の末までも及び、坐作進退、礼儀の小節に亘つて殆ど漏らす処が無いくらゐである。是れ、私が孔夫子の教を遵奉せんとするに当り、大学、中庸に拠らず特に論語を服膺し、之に悖らざらん事を孜々として是れ努むる所以である。私は論語の教訓を守つて暮らしさへすれば、人は能く身を修め家を斉へ、大過無きに庶幾き生涯を送り得られるものと信ずる。」とある。

42　渋沢栄一年表参考。（https://www.shibusawa.or.jp/eiichi/chrono.html）この年、大蔵省を辞している。

43　明治６年６月11日（1873年）

栄一創立総会ニ出席シ、銀行営業方法、三井小野両組ヨリ役員撰任ノ件、総監役ヲ設クル件ノ三案ヲ提議シ、且ツ自ラ草案セル申合規則及ビ同増補ヲ一読シテ衆ニ詢リ株主ノ賛同ヲ受ク。席上取締役ニ推薦セラレシモ尚官職ニアルヲ以テ辞シ、**翌十二日総監役就任ニ関スル契約ヲ締結ス。**（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』巻四、５頁）

上記の記述は、第一国立銀行、株式会社第一銀行設立に関する記述である。

44「三菱会社ニ対抗シテ共同運輸会社ノ設立セラレタルハ事実ニ於テ三井ト三菱トノ対抗ナルト同時ニ、**合本主義（株式組織）ヲ主張セル栄一ト個人経営主義ヲ唱フル弥太郎トノ対抗ト云フベク、**又政治的ニ之ヲ見レバ、政府対改進党、自由党対改進党ノ争ヒナリ。」（『竜門雑誌』第481号、62頁、1928年10月、渋沢子爵と郵船会社日本郵船会社創立以前の関係（伊藤米治郎））と合本主義について記載がある。ここでは、合本主義＝株式組織としているが、木村昌人は「渋沢の唱えた「合本組織」は、現在の資本主義社会での株式会社や株主の行動とはかなり違う面がみられます。まず渋沢が設立に関与した会社は、株式会社だけではなく、匿名会社、合資会社も含まれています。**それは渋沢の合本主義が、３つの要素、つまりア）使命（ミッション）イ）人材とそのネットワーク、ウ）資本から成り立っている**からです」と述べる。（https://www.shibusawa.or.jp/research/newsletter/759.html）

45　すじみち。おさめる。世話する。

●將（まさ）に其の家を經紀せんとす。始終有る者に庶幾（ちか）し。（唐・韓愈〔柳子厚墓誌銘〕）

●白川静は「交織の基本をなすものである」としている。（「字通」）

46　明治初期には灌漑用の那須野原疏水工事（栃木県）が国の直轄工事として実施されたり、明治12年から始まった国直轄の農業水利事業の第一号として安積（あさか）疏水（福島県郡山市）の開削が行われた。そのうち、那須野原疏水工事には渋沢栄一も関わった。

47　為替会社は、政府からの貸し下げ金、兌換紙幣（為替会社札）の発行、預金の受け入れなどで調達した資金を原資に、**通商会社向けの貸付**、**自ら行う直接貸付や為替の引き受け・決済などを行っていた**。（鹿野嘉昭「為替会社の意義と役割をめぐって」、同志社大学経済学会『経済学論叢』67(4)、2016年３月、937頁）

48　この段は、『実験論語処世談』の「論語を実践躬行す」の中では次のように記述されている。

「世間には、大徳の禅師を屈請して禅門の提唱を聴く篤志の方々もあらせられるが、私は昨今宇野先生に御依頼申して家族の者と打ち揃ひ毎月一回づつ論語の講義を拝聴する。然し、私は単に講義を聴いて之を楽みにするといふ丈けではない。勿論、及ばぬ勝ちな不肖の身故如何に努めても及ばぬ処も多いには相違ないが、論語にある孔夫子の遺教は一々之を身に体し、及ばぬながらも之が実践躬行を心懸け、又之を実践躬行して来た意気である。此の意味に於て私が論語に対するのは、世間の方々と多少その趣を異にして、論語の章句をそのまゝ、今日まで処世の実際に施すに力め来つたものと、過言ながら言ひ得ようと思ふ。

私は、明治六年に官を罷めて実業に身を委ねる事になつたのであるが、畢竟するに国を強くするには国を富まさねばならぬ、国を富ますには、商工業を隆盛にせねばならぬものと信じたからである。当時はまだ「実業」なる言葉がなく、之を「商工業」と称したものであるが私は商工業を隆盛にするには小資本を合して大資本とする合本組織、即ち会社法に拠らねばならぬものと考へ、この方面に力を注ぐことにしたのである。

さて愈ゝ会社を経営する事になれば、まづ第一に必要なるものは人である。明治の初年の頃、政府が親しく肝煎をして創始めた会社に為替会社とか、開拓会社とか云ふ如きものもあつたが、それが皆な良好く続かず失敗に終つたのは、当事者に其人を得なかつたからである。会社の当事者に其人を得、事業を失敗させずに成功し

ようとすれば、其人をして拠らしむるに足る或る規矩準縄が無ければならぬ、又私とても拠るべき規矩準縄が無ければならぬのに気が付いたのである。」

ここでは、渋沢栄一が『論語』を宇野哲人氏（1875年-1974年）から講義を施してもらっていたことや、『論語』の章句をそのまま処世の実践に用いようとしていたことが書かれている。

49 静則相非生滅。謐則體絶有無。**虚乃無礙圓通**。凝則寂而常照。（『大正新脩大藏經』第44冊、論疏部5、起信論疏筆削記、巻１）とある。円通とは、「弘景為人、圓通謙謹」（『梁書』處士傳·陶弘景）とあり、あまねく通じ達していることを指す。

50 又科賜百濟國、若有賢人者、貢上。故受命以貢上人・名和邇吉師、卽**論語十卷**・千字文一卷幷十一卷、付是人卽貢進。（『古事記』中巻　応神天皇）

上記の記述について『日本書記』巻第十に「十六年春二月、王仁來之。則太子菟道稚郎子、師之、習諸典籍於王仁、莫不通達。所謂王仁者、是書首等之始祖也」とあり、『論語』の記載はない。

51 京兆杜乂、陳郡殷浩並才名冠世、而翼弗之重也、毎語人曰、此輩宜**束之高閣**、俟天下太平、然後議其任耳。（『晋書』巻七十三　列傳第四十三）

52 懿律嘉量、**金科玉條**、神卦靈兆、古文畢發、煥炳照曜、靡不宣臻。（『文選』揚雄「劇秦美新〈幷序〉」）李善は「金科玉條は、法令を謂うなり。金玉は之を貴ぶを言うなり。（**金科玉條、謂法令也。言金玉貴之也**）」と註を施している。

53 恒産なければ恒心なし。（『孟子』）

●無恆產而有恆心者，惟士爲能。若民，則無恆產，因無恆心。苟無恆心，放辟邪侈無不爲已（『孟子』梁惠王上）

●民之爲道也，有恆產者有恆心，無恆產者無恆心。苟無恆心，放僻邪侈，無不爲已。（『孟子』滕文公上）

54 魯哀公問於孔子曰、有智者壽乎。孔子曰、然。人有三死而非命也者、人自取之。夫寢處不時、飲食不節、佚勞過度者、疾共殺之。居下位而上忤其君、嗜欲無厭、而求不止者、刑共殺之。以少犯眾、弱以侮強、忿怒不量力者、兵共殺之。此三者、非命也、人自取之。（『說苑』雜言）

55 『論語実験処世談』には、「当時はまだ耶蘇教は普及するまでに至らなかつたので、私は素より耶蘇教の如何なるものであるかを知るべき由も無かつたのであるが、仏教に関しても知るところが甚だ狭かつたから、私は実業界に身を委ぬるに就て則とすべき規矩準縄を耶蘇教や仏教より学ぶわけに参らなかつたのである。然し、儒教即ち孔夫子の教ならば無学ながら私も幼少の頃より親しんで来たところである。殊

に論語には、日常生活に処する道を一々詳細に説かれてあるので、之に拠りへさすれば万事に間違ひなく、何事か判断に苦むやうな場合が起つても、論語といふ尊い尺度を標準にして決しさへすれば必ず過ちをする憂の無いものと信じ明治六年実業に従事するやうになつて以来は、斯る貴い尺度があるのに之を棄てて何に拠らうかと迷ふ必要は無いと思ひつき、眷々論語を服膺して之が実践躬行に努めることにしたのである。

論語には実業家の取つて以て金科玉条となすべき教訓が実に沢山にある。仮令へば「里仁」篇の

富与貴。是人之所欲也。不以其道。得之不処也。貧与賤。是人之所悪也。不以其道。得之不去也。（富と貴きは是れ人の欲する所なれども、其道を以てせざれば之を得るも処らず。貧と賤しきとは是れ人の悪む所なれども、其道を以てせざれば之を得るも去らず）

の如き即ち其一例で、実業家の如何にして世に立ち身を処すべきものたるかを、明確に説き教へられたものである。又同じく「里仁」篇の中に

放於利而行。多怨。（利によりて行へば怨み多し）

などの句がある。其他、一々枚挙に遑なきほどで、実業家の日常生活に於て遵守すべき教訓が実に論語には多いのである」とある。

56　現代語訳は、上掲『論語』（76頁）を参照した。

57　『抱朴子』内篇に「夫升降俯仰之教、盤旋三千之儀、攻守進趣之術、輕身重義之節、歡憂禮樂之事、**經世濟俗**之略、儒者之所務也」とある。

エコノミーとしての「経済」は早くは海保青陵（1755年-1817年）が用いている。（「稽古談」）

58　『管子』牧民に「倉廩實、則知禮節。衣食足、則知榮辱」とある。また、『続日本紀』に「詔曰、人足衣食、共知礼節、身苦貧窮、競為姧詐」と記述されている。これを簡略化して渋沢栄一は「衣食足而知禮節」としている。

59　人のふみ行うべき道を明らかにする教え。すぐれた聖人の教え。また、儒教の教えをいう。

60　二程子の程顥、程頤のこと。

61　宋代に起こった新儒学の一称。宋学が理を重んじたところからいう。宋学。朱子学。性理学。（『日本国語大辞典』）

62　荻生徂徠のこと。本名は物部氏なので、「物徂徠」と号した。

63　荻生徂徠は、学問は士大夫以上にとって必要と考えてはいたが、そのような記述は

現在のところ見当たらない。

64　経書のこと。

65　漢字のこと。

66　『晋書』に「司南車は、一名指南車、四馬に駕し、其下に制すること樓の如く、三級、四角の金龍羽葆（車のおおいなどにつける、羽かざり）を銜え、木を刻みて仙人と為し、羽衣（うい）を衣、車上に立て、車回運すると雖も手に常に南指す。大いに駕して出行し、先啟（けい）の乘と為す」とある。

67　見かけは異なっているようだが中身は同じであること。

　易の奇にして法ある、詩の正にして葩なる、下荘、騒、太史所錄、子雲・相如の同工異曲に逮ぶ（易奇而法、詩正而葩。下逮荘、騒、太史所錄、子雲、相如、同工異曲。韓愈「韓愈、進学解」書き下しは、猪口篤志『続文章軌範 上』新釈漢文大系、明治書院、1977年、25～26頁参照）

68　三島毅「道徳経済合一説」『中洲講話』、文雅堂書店、1909年、328頁。

69　背き離れる。韓愈　孟郊、睽；説文解字

70　知は行の始め、行は知の成れるなり。（近藤康信『伝習録』新釈漢文大系、明治書院、1961年、90頁）

71　漢学を研究する人。また、漢学についての知識や理解が深い人。（『日本国語大辞典』）「漢学」という言葉は、「漢、蒙、倭三学生、倶に外方に係わり接居し、裏糧難と為し、漢学七十人、蒙·倭学各十五人、毎日一時供給して勧励す。」（漢、蒙、倭三學生、俱係外方接居、裏糧爲難、漢學七十人、蒙·倭學各十五人、毎日一時供給勸勵。『朝鮮王朝實錄』卷六十三、世宗實錄、十六年（1434）、二月、25日）に記載されている。

72　「以公高明、自能徑造真詣、如僕**淺劣**、因公之教、亦益加深省也」（『新刻張太岳先生詩文集』）とある。